

あーち通信 2006 年 1 月号 (第4号)

神戸大学大学院総合人間科学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
(HCセンター・サテライト施設「のびやかスペースあーち」事務局)

〒657-0015 神戸市灘区鶴甲3-11

TEL 078-803-7972 / 7973 FAX 078-803-7971

e-mail: zda@kobe-u.ac.jp, itoa@kobe-u.ac.jp

特集 「あーち」の創設にあたって(4)

なぜ大学が「あーち」をつくったか

津田 英二 (神戸大学HCセンター、障害共生支援部門)

近くにあっても遠い大学

多くの人たちにとって、大学は「近くにあっても遠い存在」なのだろうと思います。

私自身は、子ども時代を仙台で過ごしましたが、近所に東北大学があって、しょっちゅう構内で野球をしたり、探検をしたりして遊ばせてもらっていました。寒い日に生協の自動販売機で買って食べたカレーヌードルの味、時々われわれガキどもとキャッチボールの相手をしてくれた大学生、帰り道に自転車のチェーンが外れて困っていたときに優しく声をかけてくれた大学生。野良犬にまわりつかれて困り果てて涙目で助けを求めたのに「うちはネコを飼ってるから」とつぶやいて立ち去った大学生。今でも妙によく覚えていることがたくさんあります。

そんなふうに私は大学と小さい頃から関わりをもってきたのですが、これはあんまり一般的な話ではないですね。神戸大学の構内で子どもが遊んでいて、学生がそれに自然に関わっているなどという光景は、神戸に赴任してから一度も見たことがありません。

大学というのは、もともと地域社会から離れた存在だったようで、これまでも何とか地域と大学とを関わらせようとする試みが行われてきました。そうした試みの歴史が一番古いのはイギリスで、19世紀からすでに労働者に大学の授業を提供しようと、各地で出張講座が開かれていたそうです。地域との間に壁がない大学をつくらうということで、社会人を学生として積極的に受け入れたり、多様なプログラムを地域に公開してきた大学もたくさんあります。仕事をもっている社会人が大学に入学してリフレッシュするリカレント教育が当たり前になっているスウェーデンなどや、コミュニティカレッジの先進国であるアメリカなどは特に有名です。

日本の大学改革

日本はというと、遅れているといつてよいと思い

ます。特に国立大学の場合、太平洋戦争以前は国家に奉仕することを目的として創られていたという経緯もあって、戦後も地域社会との関わりはそれほど優先されてきませんでした。もちろん戦後は、大学も国民に奉仕する機関となり、社会人入学の制度や公開講座などといった試みもなされてきたわけですが、どれも細々としたものでした。ですから、大学が民のものになっていないという批判的な視点に立った民衆による学習実践も、けっこうたくさんありました。中でも有名なのは、戦前の話ですが、信州の農民たちが自分たちで会を創ってお金を集め、とても質の高い学習活動を展開していました。信濃自由大学といえます。

なかなか口を開けない貝のような大学のあり方を突き動かす契機として、2004年度からの国立大学の独立行政法人化は無視できないでしょう。法人化は、大学が社会に積極的にアピールして、多くの人々に神戸大学を選択してもらってください、そうしないと大学の運営基盤は保障されませんよ、という改革でもあります。神戸大学も地域社会といっそう強い絆を結ばなければ生き残っていけないという状況になったといえます。

神戸大学が「あーち」の運営に積極的でありながら経費は少ないという状況は、こうした政治的状況と関連があると理解できます。が、政治的状況はここではおいておきましょう。大学は本来、教育・研究の専門機関ですので、こうした機関が地域社会と強い関係をもっていくということの意味をもう一歩掘り下げてみようと思います。

知識や情報の変化

研究も分野によってずいぶん流儀が違うので、私が専門としている社会教育論やその周辺領域の話として考えてみます。まず、大学の最大の財産は知識や情報だということが出来ますが、この知識や情報が今と昔とで大違い。ちょっと乱暴にいうと、昔は

知識は貯めておくことに価値があると思われていたのが、今では知識は流通するから価値があるというふうに変化してきました。インターネットで大量の知識や情報が瞬時に世界を駆けめぐるという時代に、研究室の奥に鍵を掛けて知識や情報をしまっておくのはナンセンスです。昔は、知識や情報は高いところから低いところに流れるというイメージだったのが、今ではネットワークの中を自由に行き交うというイメージになったといってもよいかもしれません。昔は知識をたくさんもった大先生が何も知らない子羊たちに教え諭すというイメージだったのが、今では大学の先生もいろいろな人たちといっしょに悩み考えるというイメージになってきているともいえるかもしれません。

流通する知識に価値が置かれるようになると、知識の質についても重視されるポイントが変わってきます。科学は普遍性や客観性が命だといわれてきました。昔は、この普遍性や客観性の高い知識を磨くために、個別の事情には立ち入らないほうがよいとされていたこともありました。普遍的・客観的知識

にとって、個別の事情はノイズでしかなかったともいえます。けれども、個別の事情を無視した知識は、普遍性・客観性を高めるほど、逆に使えない知識になっていくこともあります。流通する知識に価値が置かれるようになると、そうした知識は机上の空論として一蹴されてしまうようになります。そういったことに気が付いた研究者は、個別の事情にじっくり取り組みながら、その中から普遍的・客観的な知識を見つけだしていこうとするようになったのです。

「あーち」の試みは、こうした知識や情報の変化と強い関連があると思います。「あーち」は、大学関係者が地域の実践者や生活者といっしょに悩み考えていこうという施設です。もうすでにパレてしまっていることだと思いますが、「大学がやってくれるのだから、質の高い完璧な実践だろう」などという期待は幻想です。その点、大学はたいしたことありません。しかし、おそらく志だけは高いといってもよいかもしれません。「あーち」での研究・教育活動は、個別の実践に取り組みながら、視線は世界に向かっています。

大学が「あーち」を通じて地域とかかわることの意味

伊藤 篤（神戸大学HCセンター、子ども・家庭支援部門）

今回は「なぜ大学が地域の活動にかかわるのか」について考えてみたいと思います。領域にとらわれず地域での支援的な活動全般についてお話するのが本来でしょうが、それをすると内容が抽象的になってしまいそうなので、子育て支援を念頭におきたいと思います。

公共交通機関で妊婦さんに席をゆずるとか子ども連れのお母さんのバギーを持ってあげるなど、支援は個人的におこなわれることがあります。また、お母さんどうしが集まって学んだり情報交換をしたりするサークル活動は個人的だけれどグループ単位でおこなわれています。サークルによっては地域の主任児童委員などの人々やまちづくりに関係した行政からの支援をうける場合もあります。こうなると個人的なものではなく公的な活動に近づきます。個人的な活動の場合は、自分（たち）がしたことに満足できたかどうかで、次からの活動の方向性が決まっています。ところが、公的な活動となると、それが本当に効果をもつのかどうかを客観的に評価する必要がでてきます。

ところが、時には、活動の方向性が決めにくかったり、客観的な評価がむずかしかったりするもあります。このようなとき、大学は「どのようにして個人的な活動を継続していったらいいのか」「公的な活動をどのように評価し次につなげていけばいいのか」についてアドバイスをすることができます。でも、これは、大学のなかにも可能です。

では、大学のなかで地域のみなさんの要請をじっと待っているのではなく、大学のそと、つまり地域に出て何をしようと言うのでしょうか。

ひとつめは、現状把握です。地域での課題はさまざまで、それらは時の流れとともに変化もします。地域の皆さんと一緒に活動することを通して、誰がどのような支援を求めているのかが明らかになってきます。大学が勝手にこんな支援が必要だろうと思っていることと現実のニーズが違っているかもしれないからです。

次に、モデルの提示です。これは、現実求められている支援に対応したサービスを試行的におこない、そのサービスを利用した人たちからの意見にもとづいて、その内容を修正していき、より効果的なサービスをつくっていく過程を公開することです。たとえば、現在、月に2回、日曜日に「妊娠期からの子育て準備教室」をおこなっています。参加してくださる方は少ないですが、その人たちの意見を取り入れて、より多くの人たちが参加しやすく、しかも満足してもらえる内容に順次工夫をこらしています。このような過程をへて効果的なサービスをつくり上げていくことは、サービスをうける側にとってもサービスを提供する側にとっても大きな意味があります。そして、これらの過程そのものが研究の対象にもなるのです。大学にとって「あーち」はまさに、このようなアクション・リサーチの場であると考えています。

「あーち」での、いろいろなプログラム（1月）

●誰でも参加できるプログラム

自由に楽しむ絵の世界 いろいろな方法で絵を描いてみましょう。絵を描くのがもっともっと楽しくなりますよ。リーダーは前田さんです。どなたでもどうぞ。主に火曜日

音楽の広場 誰でもが音楽を楽しみ、音楽を通していろいろな人と仲良くなることをめざす広場です。主に土曜日

お話の国 お話を聞きながら、ゆったりとした時間を過ごしましょう。おとなもいっしょに、贅沢な時間をどうぞ。リーダーは、マーガレットの会のみなさんです。どなたでもご参加下さい。主に土曜日

紙芝居 いろいろな年齢に応じた紙芝居。リーダーは北林さんです。主に土曜日

折り紙 折り紙名人に来ていただいています。昔ながらの折り紙の定番から、新しい創作折り紙まで、みんなでワイワイ言いながら折ります。リーダーは、井上さんと杉本さんです。どなたでも。主に火曜日・木曜日

人形遊び 人形を遊びながら、みんな仲良くなりましょう。人形になりきってみましょう。いろいろな楽しいお話しも飛び出すかも……。リーダーは、中井さんです。どなたでもどうぞ。主に金曜日

誰でもたまり場 障害のあるなしに関わらず、誰でもが、安心してリラックスできる空間づくり。主に水曜日

●3歳くらいからおとなまで参加できるプログラム
らくがきおばさんがやってくる 自分の中から湧き出てくる表現を大切にしながら、色や形で遊びます。3歳以上のお子さんが対象。リーダーはらくがきおばさん（能勢さん）です。主に金曜日

メダカ親子クラブ 「手作りおもちゃ」など、いろいろな遊びをしながら楽しく学びます。リ

ーダーは、学校の先生や、先生の経験者です。主に木曜日

立体の紙工作 おもしろい形や色の、みなさんだけのお面やとびだす絵本をつくってみましょう。リーダーは、中さんです。4歳以上のお子さんから大人まで、どうぞ。主に土曜日
サイエンス・プログラム 世の中には、不思議なことがいっぱい！ その不思議を追いかけている科学者と、楽しく実験をしたりお話しをしましょう。リーダーは伊藤真之先生や学生です。

●赤ちゃんのためのプログラム

ほのぼの音ランド ちっちゃいお子さまと保護者のみなさま、いっしょに楽しく音で遊んでみましょう。いつもとは違う子どもの表情に出会えるかも……。リーダーは淵田さんです。主に水曜日

●障害のある子どもたちのためのプログラム

ぽっとらっく 障害のある子どもを対象にした、いろいろな相談やセラピーの場です。リーダーは高田哲（さとし）先生です。主に土曜日
はっと 発達障害のある子どもを対象にした、学習プログラムです。リーダーは山根さんで、学習支援者といっしょに楽しく学びます。定員制。主に火曜日

●おとなのためのプログラム

心に浮かぶ言葉・ことばの広がり 言葉の芸術ワークショップ。参加者のみなさんと、ことばの広がりと一緒に感じ取り、考えます。リーダーは鈴木幹雄先生です。主に木曜日
筆をもとう 大人向けプログラム。きれいな字のためのちょっとしたアドバイス。リーダーは沼館さんです。主に木曜日
お母さんのおしゃべり広場 おしゃべりの輪を広げていきましょう。お気軽にどうぞ。

ご寄付について

「あーち」を支援する任意団体「子育てと共生を考える会」が創設されました。寄付金はこちらの会を通して大学に対する寄付となり、大学から「あーち」へ予算配分されます。ご寄付は、伊藤が津田に直接お渡しいただくか、下記口座にお振り込みいただき、住所、氏名、電話番号をお教え下さい。

三井住友銀行 六甲支店 普通（口座番号）4195504 （名義）子育てと共生を考える会

また、「子育てと共生を考える会」には、賛助会員制度があります。賛助会員になっていただける方は、直接お尋ねくださるか、あるいは事務局宛に住所、氏名、電話番号をご連絡いただいた上で、上記口座に会費をお振り込み下さい。会費は個人会員が5,000円、法人会員が30,000円です。